

ロスト近代の時代認識とその思想資源

北海道大学 橋本努

日本では1980年代における高度消費社会の到来とともに、「ポスト近代」という時代認識が広まった。その認識は、バブル経済の崩壊が生じる90年代の前半まで共有されたが、その後の日本社会は「失われた10年ないし20年」と呼ばれる経済の停滞状況を経験している。かかる停滞した現代の時代状況を、報告者は「ロスト近代」と呼んでいる。また「近代／ポスト近代／ロスト近代」という時代区分を、戦後日本社会に当てはめた（拙著『ロスト近代』参照）。

1945年以降の時代経験を社会的に区分する試みとして、これまで例えば、見田宗介による「理想の時代／夢の時代／虚構の時代」や、大澤真幸による「理想の時代／虚構の時代／不可能性の時代」などが提起されてきた。これらの理論枠組とは異なる仕方で、時代の区分を「駆動因」の観点から試みるならば、およそ終戦直後から60年代までを「近代」の時代、70年代から90年代中頃までの時代を「ポスト近代」の時代、そして90年代中頃から現在にかけての時代を「ロスト近代」と認定することができるだろう。

「近代」の時代は、技術革新、啓蒙的理性の拡大、宗教勢力の衰退、勤勉エートスの誕生、株式取引所の組織化、等々、さまざまな要因によって駆動されてきた。これらの要因を社会構造の観点から捉えるならば、「物象化」のメカニズムによって理論的説明を与えることができる。マルクスのいう「自然発生的な分業の体系」の帰結として、一方では、社会的活動の固定化（機械化・無味乾燥化）という「物象化」が生じるとともに、他方では、人間関係の「疎外」現象が生じたのが「近代」である。そこにおいて人は、物象化の機制のもとで資本の運動に導かれ、「時間の遅延化」を通じて「労働の回路」と「交通の回路」を発達させていく。生の享受を後回しにして自らを抑圧し、死せる労働を担う。そのような機制の下で、勤勉に働いて賃金を得たいという「欲求（倫理）」を植えつけられるようになる。

こうした「近代」の機制を超克する試みとして、多くの思想家は、物象化と疎外を排した「コミュニケーション（交響圏）」の形成を掲げてきた。しかし社会は、そのような理想とは別の方向に変容を遂げていく。「ポスト近代」の時代の到来である。

高度経済成長期からバブル経済期にかけて、日本人はもはや勤勉に働くだけでは豊かになれないという課題に直面する。時間の遅延化にもとづく物象化と疎外を自らに課すのではなく、余暇をうまく使って消費額を増やし、洗練された消費文化の発展によって経済を駆動しなければならない時代に突入した。この時代に必要とされたのは、まずもってニーズを超えた欲望を増幅させることであり、その機制は、ドゥルーズ＝ガタリ著『アンチ・オイディプス』（1972）によって象徴的に考察された。分裂症者の仮想経験は、通常的生活者の欲望から逸脱し、欲望の目的そのものを絶えずらしながら、チグハグで無定形の混沌とした欲望を増殖させていく。「欲望機械」と呼ばれるその装置は、ポスト近代社会において資本を駆動するための、中核的位置を占めるだろう。「近代」のシステムは、人々に適正な欲望を植えつけようとした。ところが「ポスト近代」においては、システムに適合しない欲望が多様に産出され、システムそのものが動態化していく。もともと臨界的な状況にあった欲望が主体の内部で解放され、人々の欲望に「遠心力」を働かせていく。かかる「脱コード化」の作用に、従来型の「コード化」の作用が絡み合いつつ、システム全体に楕円的な運動を与えたのが、「ポスト近代」の時代であったといえる。

ところが私たちの時代は、「脱コード化」の作用がしだいに衰退し、もはや欲望の肥大化（増殖）が、資本主義を特別に駆動することのない局面を迎えている。ポスト近代の時代の駆動因は、「コード化」と「脱コード化」の運動を与えた。ポスト近代の思想家たちは、その一つの極たる「脱コード化」の作用を極大化することによって、システムの破局と解体をたくらんだ。それは「反理想」の極限として想定された。だが時代はそのような投企を排して、別の方向に変容を遂げて

いく。

「ロスト近代」の時代は、欲望消費の増大によって大きな経済成長を望むことができない。かといって、人々が勤勉に働けば経済にドライブがかかるというわけでもない。「勤勉の倫理」と「欲望の肥大化」の二つはいずれも必要とされているものの、時代を新たに駆動する要因たりえない。この時代の（所得）格差は、欲望のエミュレーション・メカニズム（ワン・ランク上の欲望の模倣の連鎖）が衰退するという問題を引き起こし、欲望のもつエネルギーを、「自分がしたいことをする」という水準にまで収縮させていく。ネット社会においては「自己愛消費」が台頭し、同時に新たな社会の理想として、環境にやさしいロハス的生活が提起され、同時に情報産業を中核とした、創造による資本主義の新たな駆動のために必要な生活スタイルが模索されるようになっている。

「ロスト近代」においては、創造の源泉としての「自然の多産性」を身につけることが、同時に資本主義の駆動因を与える点に、瞠目すべき特徴がある。「創造階級」の台頭は、ポストモダン消費社会の理想や脱コード化の極限たる反理想とは別の理念を提起する。欲望の肥大化や逸脱化よりも、可能性の探求に関心が寄せられ、それは一方では、全能感のトランスによる欲求の摩滅へと方向づけられるものの、他方では創造の源泉となり、社会を動かす駆動因となる。エコロジーと両立する生活スタイルを模索し、自然から創造的多産性を学ぶという姿勢は、もはや資本主義に対抗する生活理念たりえない。それは資本主義の新たな駆動因でもあり、自然への回帰願望を携えたロマン主義の運動は、資本主義と融和する。その際の思想的資源となるのは、例えば、ネグリ＝ハートのマルチチュード（とその潜在力）論であり、セン以降のケイパビリティ論であり、あるいは「自然の本来的価値」を創造の源泉とする R.W.エマソンの思想であり、「ボボズ（ブルジョア・ボヘミアン）」の文脈で言及される M.カウリーの『亡命者帰る』などであるだろう。

「ロスト近代」の時代の思想資源は、古くは J.J.ルソーの「高貴な野生人」にさかのぼることもできる。その背後にある理想は、いつでも社会を離脱して、社会の外部でサバイバルするだけの「野生」を回復させることであり、その理念に基づいて自らの社会生活を律することであるだろう。「野生としての生」は、同時に、社会の下部構造ならぬ地下の空間において、人間の潜在能力を高めると同時に、創造の源泉を与えることにもなる。近代における「コミューン」、ポスト近代における「逸脱化」、ロスト近代における「野生」は、それぞれ時代の前衛精神であり、社会を変容する作用をもたらす。むろんこれらの精神は駆動因そのものではない。より深いところにある駆動因にとって、思想の資源は構成的であって、超越的なものではない。報告ではこの二つの要因（前衛精神と駆動因）を区別しつつ、現代資本主義の駆動因に迫りたい。